

自己と意識

——『マーティナス・スクリブレルス回想録』——

田 中 一 穂

スクリブレルス・クラブ (Scriblerus Club) の会員によって1714年に構想され1741年に出版された『マーティナス・スクリブレルス回想録』(*The Memoirs of the Extraordinary Life, Works, and Discoveries of Martinus Scriblerus*)⁽¹⁾ は自己の概念をめぐる当時の哲学的論争を主題の一つにしている。⁽²⁾ 自己の同一性は一体、常に同等に保たれているのか、あるいは時間によって異なるのか、という論争がそれである。自己の概念における前者から後者への論点の移行は、確固たる自己の輪郭が曖昧となり経験の非実定性が強迫観念となるロマン主義的精神の先駆けを成していると言えるかもしれない。⁽³⁾ すなわち融和せる対立や多様の中の統一等の隠喩により描写しえた実定的経験の世界からたんに秩序から無秩序への力点の移行のみならずその逆説的ネクサスの切断をも包摂する「不調和の調和」(*concordia discors*) 崩壊後の非実定的経験の世界への移行である。自己同一性に関する論争自体はそのような画期的な萌芽を秘めているにも拘らず、しかし、『回想録』の言説は基本的に前者にとどまっている。スクリブレリアンは外からの自己を規定しえても内なる自己を生成するには至らなかったのである。⁽⁴⁾ そこで以下ではまずロック (John Locke) に端を発する自己同一性の問題を概観し、次に『回想録』における自己の概念を明確に規定したい。

I

十七世紀末に自己の同一性を実体ではなく意識によって規定した時、ロックのそのような認識は革新的であった。⁽⁵⁾「意識」という言葉に慣れ親しんでしまっている現代の我々はロックの導入したその概念にはさほど新しさを感じないかもしれない。しかし実体としての自己という旧弊な神学的見解に挑戦した常に同じ実体としてとどまる固定的な自己と言うよりはむしろ瞬間によって異なる流動的な意識による自己のモデルの出現は、その後、十八世紀初頭イギリス思想界を震撼させたのである。「問題はこの瞬間の私が過去の、あるいは未来のあらゆる瞬間の私と同一であると言えるのかどうか」⁽⁶⁾とシャフツベリ (Anthony Ashley Cooper, Third Earl of Shaftesbury) などは述べ、「いわゆる人格的同一性を構成しているのは何かを決定しようとする知識人が躍起になっているのには理由がある」⁽⁷⁾と1714年8月9日付『スペクテイター』(*The Spectator*) では述べられ問題の巷間に浸透していた様子がうかがえる。ではロックの提唱した意識による自己の概念とはそもそも如何なる文脈の中で登場したのだろうか。我々はその登場の様子を子細に検討しなければならない。

意識による自己の概念が端的に論じられているのは『人間悟性論』(*An Essay concerning Human Understanding*)⁽⁸⁾ 第2巻第27章においてである。論点は自己の同一性が実体によって決まるのか、あるいは意識によって決まるのか、という点であり、ロックは後者を支持する。

……*self* is not determined by Identity or Diversity of Substance, which it cannot be sure of, but only by Identity of consciousness. (2. 27. 23)

しかしながらこの結論に至るまでのロックの議論が案外、稚拙なものにみえ、後にスクリプレリアンによって攻撃を受ける箇所でもあるのは、ロック独特の語法に拠るところが少なくない。ロックのテキストの中では二つの名詞“Man”と“Person”が厳密に使い分けられているが、この両者の混同、あるいは誤読が後の様々な議論を生み出していったと言っても過言ではない。⁽⁹⁾

“Man”がいわゆる肉体をもった実体としての「人」であるとすれば、それに対し“Person”はその精神の属性を前景化した「人格」とでも言うべきものである。

But if it be possible for the same Man to have distinct incommunicable consciousness at different times, it is past doubt the same Man would at different times make different Persons…… (2. 27. 20)

同一人物であっても異なる時間に異なる意識をもてばその人は様々な人格をもつのだという主張はさほど斬新な意見にはみえないかもしれない。しかしながら“Man”と“Person”のこの区別を知らないままに次の議論を辿る時、誤解が生じるのも無理はない。意識こそが自己の同一性を保証するものであると主張するロックは、たとえば起きている時のソクラテス (Socrates) と眠っている時のソクラテスがもし同じ意識をもちえないとすれば両者は同じ“Person”とは言えない、と断言する。

If the same *Socrates* waking and sleeping do not partake of the same *consciousness*, *Socrates* waking and sleeping is not the same Person. (2.27.19)

この場合“Person”の意味をロック的文脈において「人格」と取れば同じソクラテスの「人格」は時間によって変化するものであると言っているのにすぎず、さほど問題はないかもしれない。しかしながら“Person”の意味を肉体をもった実体としての「人」と取り違えて起きている時のソクラテスと眠っている時のソクラテスは違う肉体をもった「人」であると誤読する時、様々な議論が百出し風刺家たちにも恰好の材料を提供することになるのである。もし過去の人であるソクラテスと現在のクウィンボロウ (Quinborough) の市長が同じ意識をもつならば二人は同じ“Person”である、という次の議論もまた同様の誤解を生じかねない。

This may shew us wherein *personal Identity* consists, not in the Identity of Substance, but, as I have said, in the Identity of *consciousness*, wherein, if *Socrates* and the present Mayor of *Quinborough* agree, they are the same Person…… (2. 27. 19)

実体に近い“Man”と意識に近い“Person”に区別をつけある程度の論証はすすめるものの、しかし、ロックの自己同一性の議論はこれ以上心理学的に深まることはない。ロックの自己同一性の議論は未だ深層心理学を生むことはなく、倫理的な犯罪者の刑事責任能力の有無の問題に横滑りするのである。しかも夢遊状態にあるソクラテスの犯した罪の責任が覚醒状態にあるソクラテスに問えるのか否かという問題を、見分けがつかないほど容貌の良く似た双子の一方の罪の責任を他方に負わすことができるのかという譬えに強引に結びつけるロックの論法は自己同一性の議論からはやや逸脱することになる。前者は自己の意識の所在の確定をかりうじて問うているのに対し後者は外観の類似による混同を言っているのにすぎないからである。

In this *personal Identity* is founded all the Right and Justice of Reward and Punishment……And to punish *Socrates* waking, for what sleeping *Socrates* thought, and waking *Socrates* was never conscious of, would be no more of Right, than to punish one Twin for what his Brother-Twin did, whereof he knew nothing, because their outsides were so like, that they could not be distinguished…… (2. 27. 19)

しかし意識による自己同一性と外観の類似による双子の型を刑法学的視点から無理に結合させたこの一節は『回想録』結末部におけるマーティン (Martin) とシャム双生児リンダミラ (Lindamira)、インダモラ (Indamora) との恋、結婚、その結婚が合法か違法かを問う裁判の物語の材源となり、ロックの哲学理論の破れ口からスクリブレリアンによる思わぬ副産物が産み落とされることになる。ともあれロックの自己同一性の議論は同一の“Man”において様々な

“Person”が変化することを前提に刑法学的視点から狂気対正気、酩酊対素面、昏睡対覚醒などの対立を明らかにするものの、しかし、心理学的側面から無意識対意識の対立を明るみに出すことは決してない。⁽¹⁰⁾ ロックには未だ“sub-conscious”なる語彙は提供されていないのである。ちなみに“sub-conscious”の初出はOEDによれば十九世紀初頭デ・クインシー (Thomas De Quincey) まで俟たねばならない。ではロックにとって自己同一性の縁便となる“consciousness”とは一体何であったのか。第一義的には「意識は人の心の内面を通り過ぎるものの知覚」(2. 1. 19)であるが、ロックが初めて自己同一性に意識という語彙を絡める時、時間的に重層的な意味が内包される。⁽¹¹⁾ 意識は記憶と同義に近い過去への拡がりをもつのみならず、

For since consciousness always accompanies thinking, and 'tis that, that makes every one to be, what he calls *self*; and thereby distinguishes himself from all other thinking things, in this alone consists *personal Identity*, i. e. the sameness of a rational Being: And as far as this consciousness can be extended backwards to any past Action or Thought, so far reaches the Identity of that Person: it is the same *self* now it was then: and 'tis by the same *self* with this present one that now reflects on it, that that Action was done. (2. 27. 9)

過去把持と未来予持を限界とする今に巻き込まれて現在の自己を同定する。

For it is by the consciousness it has of its present Thoughts and Actions, that it is *self* to it *self* now, and so will be the same *self* as far as the same consciousness can extend to Actions past or to come. (2. 27. 10)

意識はもはや相対的な差異の知覚と言うよりは絶対的な差異、すなわち時間の直観と成り、自己同一性の表象、自己の純然たる現前の名辞と成っている。⁽¹²⁾ ロックの意識による自己同一性の認識はこの点においてロマン派的な純粹自我

の前哨戦とは成っているものの、しかし、不可視の識閥の領域まで踏み込むことはなかった。いわんやスクリブレリアンに至っては上記引用箇所を『回想録』の中でありふれた靴下の修繕の物語に書き換えてしまう程である。では自己の概念をめぐる哲学的論争を文学的手法で戯画化するスクリブレリアンの手口とは如何なるものなのか。次に詳しく検証してみよう。

II

全十七章から成る『回想録』のうち自己の概念を主題とする箇所は主に次の三つの部分に分けられる。⁽¹³⁾ 第一に実体による自己の主題を扱った第七章、第二に意識による自己の主題を扱った第十二章、そして第三に自己同一性の混乱の主題をシャム双生児の逸話に託した第十四、十五章である。このうち哲学的論争と文学的手法が止揚された第三の部分 が最も重要であるが、以下では第一の部分から各章を順次、分析することにより『回想録』における自己の概念をより明確に規定したい。

「修辞学、論理学、形而上学」と題された第七章において主人公マーティンは友人クラムビー (Conradus Crambe) と共に父コーネリウス (Cornelius) から章題に書かれた三つの学問のうち主に論理学と形而上学の手解きを受ける。マーティン対クラムビーの対比はかつてナンニー (Max Nanny) によって『トリストラム・シャンディ』 (*The Life and Opinions of Tristram Shandy, Gentleman*) におけるトービー (Toby Shandy) 対ウォルター (Walter Shandy) の対比が「物対言葉」の対立で置き換えて捉えられたように、⁽¹⁴⁾ あるいはそれを先取りするかのよう、物それ自体に留まろうとするマーティンと言葉を弄するクラムビーの対立として描かれている。このためマーティンとクラムビーは教師コーネリウスの教えを受ける学生という立場では共通しているものの、実際、議論を行うのはもっぱらクラムビー対コーネリウスであり、クラムビーとコーネリウスは共に言語人間の範疇で括られる。寡黙なマーティンはクラムビー対コーネリウスの議論の趨勢を黙って聞く姿勢をとり、時に感覚に訴える物それ自体や抽象的観念のうちにも具体的事物の例を挙げるよう示

唆しはするものの、自ら議論に積極的に参加することはあまりない。では共に言語人間であるクラムビー対コーネリウスの議論の対立は何を意味するのだろうか。論点は実体による自己同一性という命題に関する是非でありクラムビーはそれを否定しコーネリウスは肯定する。

Thus Crambe would tell his Instructor, that All men were not *singular* ; that Individuality could hardly be praedicated of any man, for it was commonly said that a man is not the same he *was*, that madmen are *beside themselves*, and drunken men *come to themselves* ; which shews, that few men have that most valuable logical endowment, Individuality. Cornelius told Martin that a shoulder of mutton was an individual, which Crambe denied, for he had seen it cut into commons : That's true (quoth the Tutor) but you never saw it cut into shoulders of mutton : If it could (quoth Crambe) it would be the most lovely individual of the University. (119)

同一人物における現在と過去の連続性の否定といい、狂気対正気、酪酊対素面の二面性を自己の不在と現前という独特の表現方法を根拠に肯定するその仕方といい、クラムビーは明らかに実体による自己同一性を否定するロック的人物である。これに対し羊の肩肉を例に実体による自己同一性を肯定するコーネリウスは旧弊な神学的見解を重視する反ロック派を象徴する。クラムビー対コーネリウスの対立は、しかし、たんに論理の対立を象徴するだけではない。各々の論理を構築する言説への関わり方がそもそも二人の差異を生みだしているのである。クラムビーはあくまで論理の周縁に立ち中心に深入りすることなく表層との戯れを反復するのに対し、コーネリウスは頑迷に原則に拘泥し論理を強固に構築する。二人の言説への関わり方の相違そのものが流動的な自己の型と固定的な自己の型を印象づける契機ともなっているのである。旧弊な実体の概念を逆手にとり戯画化するクラムビーは実体を定義の如く「偶然から成る主体」“subject of accidents”⁽¹⁵⁾ではなく「偶然の影響を被りやすいもの」

“subject to accidents” と言い、前置詞の置換による言葉遊びにより表層と戯れることしかできない。

When he was told, a *substance* was that which was *subject to accidents* ; then Soldiers (quoth Crambe) are the most substantial people in the world. Neither would he allow it to be a good definition of *accident*, that it could be *present or absent without the destruction of the subject* : since there are a great many accidents that destroy the subject, as burning does a house, and death a man. (119)

実体による自己同一性肯定派は魂とほぼ同義の“immaterial substance”の不滅性をしばしば主張した。もとより彼らにしても“material substance”の不滅性までも肯定したわけではなかったのだがクラムビーの表層との戯れにより実体の不滅性が狙上に載せられる。クラムビーにとっては非物的実体にせよ物的実体にせよ実体は不滅ではなく滅びゆくものなのである。主体を破砕する偶然の支配を受けやすい兵士はその意味でもっとも実体的な人物なのである。これに対してコーネリウスはあたかも実体を物的実体と非物的実体に分けて後者の不滅性を主張した実体による自己同一性肯定派の如く死を二種に分類し自説の正当性を主張する。

But as to that, Cornelius informed him, that there was a *natural death*, and a *logical death* ; that though a man after his natural death was not capable of the least parish-office, yet he might still keep his stall amongst the logical praedicaments. (119)

肉体は滅んでも魂は不滅式のいささか単純な論理でコーネリウスはあくまで非物的実体の不滅性を説き実体による自己同一性説を推進する。コーネリウスのこうした論理に対するクラムビーの言語反応は抽象的理論を具体的事例で相対化する特徴を有し排除された例外を再び前景化することにより中心が実は排除

された周縁を基底にのみ成立していることを明るみに出す。論理を真っ向から紛砕するのではなく論理を真理に見せかけている疑似整合性を表層との戯れにより現出せしめるのである。コーネリウスの論理を受けてクラムビーは “*Habitus was more a substance than he was ; for his cloaths could better subsist without him, than he without his cloaths*” (120) と主張するものの二つの単語 “substance” と “subsist” の音の類似や “without” の前後の倒置反復等の言葉遊びにより力点は論の主張と言うよりも論を主張することの空虚さに移行している。クラムビーは自ら主張する言説に距離を置き決して同化することはない。その例が最も著しいのは第七章の結末部である。“substance” と響き合う “subsistence” の内包する二つの意味、すなわち (1) 「存続」と (2) 「糧」を掛け合わせることでクラムビーは実体論者に対する見せかけの同情を稀薄にする。

Crambe regretted extremely, that *Substantial Forms*, a race of harmless beings which had lasted for many years, and afforded a comfortable subsistence to many poor Philosophers, should be now hunted down like so many Wolves, without the possibility of a retreat……He thought there should be a retreat for poor *substantial Forms*, amongst the Gentlemen-ushers at court ; and that there were indeed *substantial forms*, such as *forms of Prayer*, and *forms of Government*, without which, the things themselves could never long subsist. (124)

旧弊な存在論に対する同情と戯れはクラムビーの場合、後者により重点が置かれ、実体論を主張した哲学者が受けた恩恵は “subsistence”、すなわち永きにわたる自己の「存続」と同時に生活の「糧」にすぎず、またたとえ魂、精神性、非物的実体等を暗示する “*forms of Prayer*” 無しには事物は永続しないことを実体論者よろしく主張するものの、最後の “subsist” という言葉自体が多義性を孕み当の主張している論を突き崩す動因ともなっているのである。そこでこうした実体論の批判的対象化を踏まえて意識による新しい自己の型が第十二

章では登場する。以下、検証してみよう。

第十二章は“Free-Thinkers” (137) の秘書からマーティンに宛てた書簡で構成されている。秘書の議論は一見、意識による自己同一性を肯定する立場をとり、議論のすすめかたは意識による自己同一性否定派の論を紹介した後にそれを反駁する形式を採っている。最初の反論の対象となる説は自意識は如何なる物にも内在しないという説である。

One of their chief Arguments is, that *Self-consciousness* cannot inhere in any system of Matter, because all matter is made up of several distinct beings, which never can make up one individual thinking being. (138)

“matter”と“thinking”の結合と分離もまた当時の哲学的論点の一つであり、⁽¹⁶⁾ 思考は物の属性にすぎず思考は物に内在することを唱えた唯物主義者に対して、思考は物から独立してあたかも浮遊するかの如く存在することを唱えた観念論者の対立があった。ヨルトン (John W. Yolton) が指摘するように、⁽¹⁷⁾ 当時 “Free-thinker” という言葉は “materialism” を容易に連想させ、この第十二章における自由思想家の秘書もまた同じ立場をとっていると言えよう。思考は物に内在することを前提に意識とは単一の存在における単一の性質ではなく同一の主体における様々な様態の表象なのである。

……the Self-consciousness is not a real quality inherent in one Being (any more than meat-roasting in a Jack) but the result of several modes or qualities in the same subject. (138 – 39)

しかし様々な意識の変容は同一主体内における変化ではなく、主体自体が別の主体に変化し、自己同一性は多様な意識によって保たれているのではなく、意識の変容に従って主体自体も別の物に移り行くのであるという反論が考えられる。次に秘書を悩ます説はそうしたいわゆる“a flux body” (140) 説である。⁽¹⁸⁾ しかし流動体説に対する秘書の反論は第七章に登場したクラムビーと同様に論

を真正面から突き崩すものではなく搦手から攻める戦法をとる。意識が過去、現在、未来に時間的に広がる限り自己の同一性は保持されるというロックの論を踏まえながら流動体説に反論するものの、秘書の言説は実体の例として卑近な靴下をとりあげるにより形而上学を形而下に貶める。ウーステッド製の靴下の綻びを絹糸で繕う間については絹製の靴下となった場合、繕うたびにある程度の意識が伴えばウーステッド製であろうと絹製であろうと修繕の前後で靴下が靴下であることに変わりはない。

Sir John Cutler had a pair of black worsted stockings, which his maid darn'd so often with silk, that they became at last a pair of silk stockings. Now supposing those stockings of Sir John's endued with some degree of Consciousness at every particular darning, they would have been sensible, that they were the same individual pair of stockings both before and after the darning ; and this sensation would have continued in them through all the succession of darnings ; and yet after the last of all, there was not perhaps one thread left of the first pair of stockings, but they were grown to be silk stockings, as was said before. (140)

意識による同一性の主張にはちがいないが秘書のやり方はロックの論理の敷衍と言うよりは表層のなぞりにすぎない。形而上的な論理から言えば一体、意識の帰属が実体（靴下）に元来、存するのかが論点であるはずなのに、実体の知覚者の意識を実体の意識と読み替えている点に問題があろう。しかしそれが問題となるのは哲学的視点を前提とし上記引用箇所背後に間テクスト的な要素を認めた場合にのみ可能であろう。上記引用箇所は間テクスト的な哲学的視点を除けばジョン・カトラーの靴下の修繕というごくありふれた物語を語っているのにすぎないからである。日常の物語の表層の整合性によりテキストには不在の机上の論理の疑似整合性を浮上させるやり方である。言葉遊び等の表層との戯れにより周縁から論理の中心を批判したクラムビーに対し、表層を大幅に変更することなく論理の中心から排除された例外の不在性を暴露したの

が秘書であろう。実体による自己の型にせよ意識による自己の型にせよ共にスクリブレリアンによって戯画化されてはいるものの、一口に戯画化などと言っても、その手法は既に見てきたように第七章のクラムビーと第十二章の秘書のそれでは微妙な違いがある。後者のほうが基になる論理に一層、表面上は密着しているために果たして真の批判の対象が何なのか見えにくくしてあるからである。秘書は論理の上では意識による自己の型を肯定してはいるものの、靴下談義に見られるようにその肯定の仕方の内実は排除された例外の不在性を浮き彫りにし隠蔽された疑似論理の摘出を行うという方法を用いている。逆に言えば何気ない日常的な言説の裏に真の批判の対象が隠蔽されてはいるものの表層のレベルでは日常的な等質性を保ち続け如何なる亀裂も生じていない。秘書はいわば涼しい顔をしたままその姿勢を崩すことはないのである。ともあれ言葉遊びという戦法を駆使し実体による自己の型を批判するクラムビーにせよ、平静を装い一見、意識による自己の型を肯定してみせる秘書にせよ、共に論争の当事者を具現化した人物にすぎないことに変わりはない。これに対し自己の概念をめぐる哲学的主題が登場人物に寓意化されるのはシャム双生児リンダミラー インダモラとマーティンの恋の物語から構成されている第十四、十五章においてである。次に検討してみよう。

文学テキストの材源には過去の夥しい数の文献の他に作者の眼に映る同時代の風景もまた看過できない要素の一つに挙げられよう。第十四章に登場するヒドラの双生児は過去の文献に現れる数々の奇形の怪物を原型にもつだけでなく、当時、实在しヨーロッパ中を見せ物として引き回されたシャム双生児をモデルにしている。⁽¹⁹⁾ シャム双生児リンダミラー インダモラは全くの荒唐無稽な虚構ではなく背景には身近なモデルが実在していたのである。このモデルとなるシャム双生児は1701年10月26日にハンガリー (Hungary) で生まれヘレナ (Helena) とジュディス (Judith) という名であった。頭は二つながらも背中から尻にかけては合体しており女性器と肛門は共有していた。スクリブレリアンの一員であったスウィフト (Jonathan Swift) なども1708年6月、スターン (Dean Stearne) に宛てた手紙の中で「背中が合体している姉妹の見せ物があり巷の話題となっている。宗教的にも法的にも医学的にも論議をよんでいるよ

うだ」⁽²⁰⁾と述べている。ロックに代表される自己同一性の抽象的理論を根底から揺るがす具体的事象の出現である。スクリブレリアンは自己同一性に関する抽象的理論を寓意化するためにこのモデルを利用しシャム双生児リングダミラーインダモラを創造したのであろう。リングダミラーインダモラは果たして一人と言えるのか、あるいは二人なのかを問うことにより哲学的議論は相対化されるのである。マーティンの恋するリングダミラが「哲学者のためだけに自然の女神が創り給うた傑作」(149)であるのはたんにテキスト内の登場人物マーティンが哲学の教育を受けたことを示唆するだけでなくテキスト外の実在の哲学者の姿勢をも問うているのである。ではリングダミラーインダモラの自己同一性は如何なる手法で問われているのだろうか。テキストを具体的に追ってみよう。

リングダミラーインダモラの自己同一性が最も問題になるのはマーティンとリングダミラの結婚の合法性が問われる裁判の場面である。マーティンはリングダミラと結婚するもののリングダミラはインダモラと女性器を共有しているためにマーティンとリングダミラの合法的な性行為は即、インダモラとの姦通、重婚罪として告発される。マーティンを弁護する側にはペニー・フェザー (Dr. Penny-Feather)、一方、マーティンを告発する側にはレザーヘッド (Dr. Leatherhead) がいる。このペニー・フェザーとレザーヘッドの陳述が第十五章の大部分を構成している。論点は生殖器による自己同一性という命題に関する是非でありペニー・フェザーは肯定しレザーヘッドは否定する。ペニー・フェザーがリングダミラーインダモラを同一人物であると考えた根拠はその共有する生殖器にある。自己同一性に関する議論は実体による自己の型にせよ意識による自己の型にせよ核となる本質を前提とすることで成立していた。伝統的な理論では実体が前提となりロックの新理論では意識が前提となり各々の言説が構築されていた。ペニー・フェザーの言説は同様に核となる本質を前提としながら、言い換えれば統語的に“……is not determin'd by……but……”という形式を借用しながら、本質に当たる部分を生殖器と置き換えているところが興味深い。一つの生殖器こそが個性の本質、自己同一性を決定するものであると強調すればするほどテキストの背後に潜む真摯な理論の空虚さが響く効果

をもつ。

It will be necessary to determine the *constituent Principle and Essence of Individuality*, which, in respect to mankind, we take to be one simple identical soul, in one simple identical body. The Individuality, sameness, or identity of the body, is not determin'd (as some vainly imagine) by one head, and a certain number of arms, legs, and other members ; but one simple, single $\alpha \iota \sigma \omicron \tau \omicron \nu$, or member of Generation. (157)

この一節を読めば誰も自己の同一性を実体ではなく意識によって規定したロックの一節を思い起こさずにはいられないだろう。ペニー・フェザーの言説はその哲学的議論の内容を問題にしているのではなく論の主張の形式を問題にしているのである。文体の模倣に拠る意識という言葉の代わりに生殖器という言葉挿入することで得られる滑稽の効果はその結果にすぎない。さらに生殖器による自己同一性説の証明のために根拠とする論拠自体は哲学的言説とは違って仮説の証明のためと言うよりはむしろ独立した物語として成立しているために陳述全体の枠組みの中で突出した印象を与える。生殖器による自己同一性説のためにペニー・フェザーの用いる論拠とはどんなに頭から聞き分けのない女性でも女性器に訴えればたちどころに従順になるといういささかセクシスト的発言である。この論拠から導かれる帰結として故に「魂の位置は生殖器にあり」(158) という魂の位置論争の振りが主張されるものの、むしろ先に挙げた論拠自体により力点が置かれている印象も拭えないのである。論拠は結論を支える例として挙げられていると言うよりむしろ独自の自己主張を行う点において論拠の仮装を纏いながらもその実質は論拠の論拠たる存在理由を失っている。その意味でペニー・フェザーの陳述はたんなる論証というよりは論証の有様を問題としているのであろう。同様の構造はレザーヘッドの陳述にもあてはまる。というよりレザーヘッドの陳述はペニー・フェザーの陳述と対を成すことで自己同一性をめぐる学者間の論争の様態を標的にしている。自己同一性をめぐる論争はロック以降、たとえばクラーク (Samuel Clarke) 対コリンズ

(Anthony Collins) の論争が最も有名であるが、⁽²¹⁾『回想録』の中では第七章におけるコーネリウス対クラムビー、第十二章における反自由思想家対自由思想家の秘書の対立として描かれていた。第十五章におけるペニー・フェザー対レザーヘッドの対立は中でも命題の内容の是非の対立を象徴するだけでなく論争の様式の擬態ともなっている。すなわちある意見を反駁する際に必然的に伴う論証の形式をレザーヘッドは模倣するのである。それは反論すべき論点の抽出と提示、しかるのちに反証例、変異例の列挙による反駁という論証形式である。抽出という操作自体、ある種の例外の排除の随伴は必然であることから反論は新たな反論を生む母体となり論争は容易に成立する。ペニー・フェザー対レザーヘッドの裁判における言説は論点の抽出に付随する例外の排斥という構造を明るみに出し論争の自家撞着性を前景化しているのである。自己の概念をめぐる『回想録』における言説は概念の更なる洞察と言うよりも概念を規定する言説の在り方を外から相対化することに終始していると言えるだろう。

このように『回想録』における自己の概念などと言ってもその大部分はロックに代表される哲学的言説の模倣、変形、改竄などによる表層の書換えにすぎずロマン派的な正体不明の曖昧模糊たる自我の出現までには程遠い。もちろんロックのテキストの中にも “……of this supposed something, we have no clear distinct *Idea* at all” (2. 24. 37)、 “nor……Soul always to think” (2.1. 10) などと明晰には規定できない曖昧模糊たる何かの存在を仮定したロマン派的自我の萌芽らしき箇所がないわけではないが、スクリブレリアンはその点をも含めて深く追求することはなかったのである。ロックは自己を意識によって規定することにより哲学的言説の新たな局面を一面で切り開いていったが、スクリブレリアンは哲学的言説を文学的手法で突き崩すことに成功したものの新たな自己の概念を本質的に規定したわけではない。自己と意識の弁証法の織り成す闇の死角の出現はロマン派の登場まで俟たねばならない。自己と他者の不可視の境界、存在と非在の触知不可能な分界を識閥により追求し始めるまでにはもう少し時代を下らねばならないのである。⁽²²⁾ こうした『回想録』における自己の言説の限界は十八世紀初頭の時代に生きた作者スクリブレリアンの自己の限界を図らずも示していたのかもしれない。

注

- (1) テキストは *The Memoirs of the Extraordinary Life, Works and Discoveries of Martinus Scriblerus*, ed. Charles Kerby-Miller (1950; Oxford: Oxford UP, 1988) による。以下、邦題は『回想録』と略す。
- (2) Christopher Fox, *Locke and the Scriblerians: Identity and Consciousness in Early Eighteenth-Century Britain* (Berkeley and Los Angeles: U of California P, 1988) 10.
- (3) Fredric V. Bogel, "Structure and Substantiality in Later Eighteenth-Century Literature," *Studies in Burke and His Time* 15 (1973 - 74) :143-154参照。
- (4) Douglas Lane Patey, "Art and Integrity: Concept of Self in Alexander Pope and Edward Young," *Modern Philology* 83 (1986) :367.
- (5) Ernest Lee Tuveson, *The Imagination as a Means of Grace: Locke and the Aesthetics of Romanticism* (1960; New York: Gordian P, 1974) 27.
- (6) Anthony Earl of Shaftesbury, *Characteristics of Men, Manners, Opinions, Times*, ed. John M. Robertson, 2 vols. (1900; Gloucester: Peter Smith, 1963) 2 :275.
- (7) Joseph Addison and Richard Steele, *The Spectator*, ed. D. F. Bond, 5 vols. (Oxford: Clarendon P, 1965) 4 :575.
- (8) テキストは John Locke, *An Essay concerning Human Understanding*, ed. Peter H. Nidditch (Oxford: Clarendon P, 1975) による。
- (9) Fox 39.
- (10) Locke 342-44参照。
- (11) Fox 32 - 33.
- (12) Marshall Brown, "The Pre-Romantic Discovery of Consciousness," *Studies in Romanticism* 17 (1978) :400.
- (13) Fox 96.
- (14) Max Nanny, "Similarity and Contiguity in *Tristram Shandy*," *English Studies* 60 (1979) :434.
- (15) Fox 98.
- (16) John W. Yolton, *Thinking Matter: Materialism in Eighteenth-Century Britain* (1983 ;

Oxford : Basil Blackwell, 1984) 参照。

(17) Yolton 11.

(18) Kerby-Miller 139 - 40参照。

(19) Kerby-Miller 294 - 95n. ; Fox 67 - 68, 109参照。

(20) Jonathan Swift, *The Correspondence of Jonathan Swift*, ed. Harold Williams, 5 vols.
(Oxford : Clarendon P, 1963) 1 : 82.

(21) Fox 18 - 19.

(22) Brown 398.